〈論　文〉

オノマトペの語義の変遷について
―「ほのぼの」「つやつや」を例に―

佐々木　文　彦

キーワード：オノマトペ，語義の変遷，ほのぼの，つやつや，本居宣長

はじめに

オノマトペ（音象徴語）(注1) は，「擬音語・擬声語・擬態語」などの名が示す通り，鳴き声や物音，動きやものの様子などを言語音に写したものであるから，言語音と語義との間に関連性がある。一般に，語形（言語音）と語義の結びつきは恣意的であるという原則から逸脱しているという点で特異な語彙群である。

例えば，「猫」を日本語では「ネコ [neko]」と言い，英語で「cat [kæt]」と言うのは，それぞれの言語において語義と語形とが恣意的な記号で結びついているのであり，どうして「猫」が「ネコ」という音で表されるのか，どうして「目」を「メ」という音で表すのか，という議論には意味がない。

これに対して，オノマトペにおいては語形と語義との結びつきに関連性がある。例えば，表1に見られるような対比が見られ，語基の末尾に「リ」や促音（ッ）をもつ形は1回的で瞬間的あるのに対してコロコロのような畳語形は継続的な動きを表すこと，清音に比べて濁音の方が大きく重く，抵抗が大きいさまを表すことなどは広く知られており，これは語形（言語音）と語義との間に関連性があることを示していると考えてよい。

表1　語形と語義の対応関係

	小さい・軽い	大きい・重い
瞬間的	コロリ・コロッ	ゴロリ・ゴロッ
継続的	コロコロ	ゴロゴロ

オノマトペ以外の一般の語においては「コマ（独楽）／ゴマ（胡麻）」の意味の関連性を考えても意味がないが，オノマトペにおいては「パラリ／パラパラ」や「パラパラ／バラバラ」の意味の関連性を表1と照らし合わせて理解することができる。

オノマトペにおいて語形と語義とが密接に結びついているのだとすると，語形を見れば（言語音

を聞けば）語義をある程度想像できるのだろうか。もしそうなのだとすると，日本語学習者などにとってオノマトペは習得しやすい語群であるはずだが，実際にはその反対でオノマトペは習得が難しいという。

本稿では，オノマトペの意味と用法について，多くの用例を参考にしながら考察してみることにする。

1. オノマトペの慣用性

オノマトペの意味が語形（言語音）と結びついているならば，一つの語がもつ音から想起される範囲内ならば，広くさまざまな現象に用いられる，と考えてもよさそうなのであるが，実際にはそうではない。一つの語形と結びつく語義はある程度限定され，用法は固定的である。しかも一般語と同様，歴史的に意味・用法が変化する場合が少なくない。

例えば「ずかずか」というオノマトペは，「ずかずか」と聞きなされる音を発する現象を模したものであるはずだから，「ずかずか」という語そのものの音から想起される事象を広く表してもよさそうである。ところが，実際には「ずかずか」という語が用いられる意味範囲はそれほど広くない。『暮らしの言葉　擬音・擬態語辞典』（講談社）では，

ずかずか

普通なら遠慮したり躊躇したりするはずのところに少しの遠慮もなく立ち入る時の，歩く様子。例えば，挨拶もなしに家の中に入る場合や，部屋に土足で上がりこむ場合などに用いる。

また，詰め寄るように，平然と人に歩み寄る場合にも用いる。（用例略）

［参考］室町時代の狂言では「『のこぎりをもってきた』…『さあらばきらふ』（づかづかと，ふたつきるまねをする）（『連歌盗人』）のように，のこぎりで物を切る音にも用いられた。現代語なら「ぎこぎこ」「ごしごし」などを用いる。（小島聡子）p246

と説明している。現代語の「ずかずか」は「無遠慮に立ち入ったり近づいたりする時の歩く様子」を表すのであり，用法が限定的である。[参考]の補足説明を見ると古くはのこぎりでものを切る「音」も表していたのであり，意味用法が変化したと考えられるが，現代語において「無遠慮に歩く様子」という限られた文脈でのみ用いられることを考えると，その変化の過程で用法が限定され，慣用的に定まったものと見られる。

また，「ずかずか」ほど限定的でないにしても，「ぱらぱら」は

①小さい粒状のものが，散らばったり落ちたりする音，またその様子。

②本やノートのページをめくる音，またその様子。

③人の集まりがよくない様子。

④一か所に固まらずに散在する様子。（用例略　前掲同書　佐々木文彦　p397）

のような意味をもっており，①にあたる現象はさまざまなものがありうるが，②③④などは限られた事柄を指しており，慣用的に定まったものと見られるのであり，オノマトペは一種の慣用表現であるということができる。

以下では「ずかずか」と同じように時代によって意味・用法が変化したと見られる「ほのぼの」と「つやつや」のふたつの語を例に，オノマトペのもつ「慣用表現」としての性格が意味・用法の変遷とどのように関連付けられるのか，具体的な用例の観察を通して考察してみることにする。

2.「ほのぼの」の意味・用法

2.1　辞書の記述と現代の用法

『明鏡　国語辞典　第二版』では，「ほのぼの」(注2) は次のように説明されている。

①ほのかに明るみが感じられるさま。「―と夜が明けてくる」②ほのかに暖かみが感じられるさま。「―（と）した友情」

②の「ほのぼのとした友情」のような言い方はよく目にするが，「ほのぼのと夜が明ける」という用法は，現代の用法としてはあまり目にしないように思う。新聞の用例を集めてみると (注3)，見出されるのは，

1　家族と対面する瞬間のほのぼのとした空気，本当にうれしそうなご主人や子供たちの笑顔に，見ている方も温かい気持ちになる。(2011.10.26)
2　70年代から2004年までに描いたほのぼの感漂う原画作品45点が並ぶ。(2011.10.14)
3　中年夫婦の心のすれ違いと和解を描くストーリーで，ほのぼのとした情感にあふれ，現代の作品にはない味わいを感じた。(2011.09.13)

のような例ばかりであり，最近の100例を見た限りでは，古歌を引いた例などを除くと，すべて「人情の温かみ」や「人と人との温かい心の交流」など，人の感情を描写する場面で用いられている。用例を100例でなくさらに増やせば「ほのぼのと夜が明ける」という例も見つかるかもしれないが，きわめてまれであると考える。

実は，現代において人情の温かみや心地よさなどを表すこの「ほのぼの」は，平安時代においては，

4　月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして とよみて，夜のほのぼのと明くるに，泣く泣くかへりにけり。(『伊勢物語』四　西の対)
5　ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ，(『源氏物語』御法)

のように「夜が明けるさま」をもっぱら意味していたのであり，それが次第に変遷をとげたものである。この語の用法がどのように変遷したのか，考えてみることにする。

2.2　江戸時代の和歌の解釈

江戸時代の国学者，本居宣長に『新古今集　美濃の家づと』(注4) という新古今和歌集の注釈書がある。その中に次のような興味深い記述が見られる。

ほのぼのと春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたな引〔二〕
初ノ御句，かすみたな引へかゝれり，二の御句へつゞけては心得べからず，（以下略）

宣長の説によれば，初句の「ほのぼのと」はそのまま二句目に続けて解釈するのではなく，それをとび越えて「かすみたな引（びく）」につなげて解釈するということになる。素直に読めばこの歌は三句目の「来にけらし」で切れ，「春が空にやって来た」と推定する根拠を「天のかぐ山に霞がたなびいている」という内容をもつ下の句で示している，と理解することができ，そうなると初句の「ほのぼのと」は二句目につづけて，

かすかに春が空にやって来たらしい

のように解するのが自然であるように思われるが，なぜ宣長はそのような「自然な」解釈を避けてわざわざ「かすみたな引」にとび越えてつなげようとしたのだろうか。

「ほのぼの」の現代の意味は「心温まる」「心地よい」感情を表すことを前節で確認したが，「春の訪れ」も「霞がたなびく様子」も，現代の用法とは異なる。宣長の江戸時代において，この「ほのぼのと」はどのような意味で用いられていたのか，また，『新古今集』の鎌倉時代ではどうだったのか。次節からはこの語の用例を通時的に観察してみることにする。

2.3　平安時代の「ほのぼの（と）」

まず，「ほのぼの」という語は『古今和歌集』(905年）から見える語である。古今集の例は

6　ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ（409）

という歌であり，「明石」という地名と結びついているが，この「明石」は地名と「（夜が）明く」との掛け詞になっていると解されるものである。この時代の「ほのぼの」の用例は先に見た4（伊勢），5（源氏）の例に見るように「（夜が）明ける」さまを表す例が多く，『古今』の例も「明く」にかかる例と解しておく。直接「明く」という動詞と結びつくもののほかに，

7　春宮の御方々めぐるほどに夜明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけに，いたく酔ひ乱れたるさまして，（『源氏物語』真木柱）
8　十日の，まだほのぼのとするに，御しつらひかはる。（『紫式部日記』）

のように，夜明けの時分を「ほのぼのとをかし」「ほのぼのとす」のように表現する例なども見え，「ほのぼのと」の語が夜明け（朝）の情景の中で用いられる例は全部で29例見出される。

これに対し，夜明けの情景ではない場面に「ほのぼの」が用いられる例は，

9　さすがに，男の御具さへほのぼのあるを，されてをかしと見たまふ。（『源氏物語』末摘花）
10　涙のみなりゆく御けはひを，中納言典侍ぞ，ほのぼの聞きつけて，（『狭衣物語』）
11　すこし，ほのぼの気色知らせたてまつりなどしてこそ。（『夜の寝覚』）

のようなものである。9は「女性の調度の中にほんの少しだけれど男物の道具がまじっている」さま，10は「泣いている気配をかすかに聞きつける」さま，11は「ほんの少しでも事情を知らせる」意をそれぞれ表しており，「かすかなさま」「ほんの少し」などの程度を表している。このような「夜明けの光景」を表していない例は全部で27例である。そして，用例4から11までの下線部を見比べればわかるように，

「ほのぼのと」　夜明けの光景　（情態）
「ほのぼの」　かすか，ほんの少し　（程度）

と「と」語尾のあるなしで意味が明確に使い分けられている。(注5) 例外は，

12　空の雨雲晴れて，ほのぼの明けゆく山際，春ならねどをかし。（『狭衣物語』）

で，「と」がない形であるのに夜が「明く」と結びついている例であるが，この1例のみである。この作品が平安末期（1070年ごろ）の成立であることから，次の時代への過渡的な例である可能性があると考えておく。

さらに，「と」のない「ほのぼの」が夕暮れ時や月明かりがかすかである光景に用いられている例があることにも注意すべきであろう。

13　寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔（『源氏物語』夕顔）

管見の範囲では平安時代のこれにあたる例はこの1例のみであるが，鎌倉時代以降増えてくる。以上をまとめると，

平安時代には「ほのぼのと」(情態副詞）と「ほのぼの」(程度副詞）とが使い分けられており，「ほのぼのと」は夜が明ける光景を表す語であった。

ということができる。ちなみに用例数は次の表2のとおりである。

表2　平安時代の用例

朝（夜明け）	朝以外の薄明り	その他（程度）
29	1	25

2.4　鎌倉・室町時代の「ほのぼの（と)」

鎌倉時代になると前節の表2で見た「光（朝以外)」，つまり夕暮れや月夜のぼんやりしたさまを表す例が増えてくる。用例数の表を先に示すと次の表3ようになる。

表3　鎌倉・室町時代の用例

朝（夜明け）	朝以外の薄明り	その他（程度）
51（1）	14（7）	3（3）

（　）内は「と」語尾が逆転した例。内数。

全体の割合から見ると夜明けの光景を表す例が増えるのであるが，その一方で夜明け以外の月の光や夕暮れ時を表す例が増えてくる。

14　「月の光もほのぼのにて，けしきえ見えじ」など言ひて，(『建礼門院右京大夫集』)
15　木の間の月ほのぼのに，常よりも神さび，(『山家集』)
16　夕べの空もほのぼのと，月になり行く山陰の（『禅竹関係の能　芭蕉』)
17　海人の小舟のほのぼのと，見えて残る夕暮れ。(『世阿弥時代の能　八島』)

そして16・17の例に見るように「ほのぼのと」の形でありながら夜明け以外の「月」や「夕暮れ」の薄明りを表すものが7例見出される。これに対して，夜明けの情景を表す例で「と」語尾のないものは1例にとどまる。

さらに，注目しなくてはならないのは，「その他」つまり薄明り以外の程度を表す例はわずかに3例であるが，すべて「と」語尾をもつものであって，平安時代とはまったく逆になっている。ただし，3例とも室町時代の御伽草子や能の例であり，鎌倉時代の例は見えない。

鎌倉・室町時代では夜明けの光景が「ほのぼのと」で表されるという点では平安時代と同じであるが，夜明け以外の薄明りを表すのには「ほのぼのと」と「ほのぼの」が半々で用いられ，薄明りの情景と関わらない「程度副詞」の用法は著しく減って室町時代の3例のみ，しかも「ほ

のぼのと」の形ばかりである。

ということができる。

2.5　江戸時代の「ほのぼの（と）」と宣長の解釈

江戸時代の用例は，表４に見る通りであり，「その他」の割合が少し増えた程度で大きな変化はない。

表 4　江戸時代の用例

朝（夜明け）	朝以外の薄明り	その他（程度）
17（2）	4（1）	6（3）

（　）内は「と」語尾が逆転した例。内数。

ここで，宣長が『美濃の家づと』で行った「ほのぼのと」の解釈について再び考える。「ほのぼの（と）」という語は，（2.3）で見たように，平安時代においては

「ほのぼのと」　夜明けの光景
「ほのぼの」　　程度がわずかなこと

という使い分けがなされる語であった。時代が下って『新古今和歌集』が編纂された鎌倉時代においても「ほのぼのと」が程度副詞として「かすかに」「ほんのりと」のように解される例はない。よって，「ほのぼのと」が「かすかに春がやって来た」という意味で程度副詞として使われた可能性は低いと考えるべきである。

一方，江戸時代の「ほのぼの（と）」については，次のような例が見える。

18　一笑といふもの此道に好る名のほのぼのと聞えて世に知人も侍りし（『鳥の道』）
19　一笑と云ものは，此道にすける名のほのぼの聞えて，世に知人も侍し（『奥の細道』）

芭蕉の同じ句に対する序の中で用いられている表記が一方では「ほのぼのと」，他方では「ほのぼの」となっており，ともに「（名が）それとなく（評判になって）」という程度副詞として用いられている。江戸時代においては「と」があろうがなかろうが大きな違いはなく，ともに程度副詞として用いられることに抵抗がなかったと考えられるのである。

宣長が『美濃の家づと』で注を加えた背景についてまとめるならば，

平安時代に「ほのぼの」がもっていた「かすかな」「わずかな」という意味合いが，鎌倉・室町時代を経て夜明け以外の薄明りの情景とも結びついたため，江戸時代において一般には「ほ

のぼのと」が必ずしも夜明けの情景を表す語とは認識されなくなっていた。そのため，江戸時代の一般的感覚からいえば「ほのぼのと（＝かすかに）春が来た」と理解するのに問題はなかったが，『新古今』の時代はまだ「ほのぼのと→明く」が普通の用法だったのであり，それに基づいた解釈をすべきであると宣長は主張しようとしたのである。宣長は，「ほのぼのと」は夜明けの情景を表すという理解の上に立って，春の訪れではなく，春の朝の情景を表すものであったと解釈した。

と推測できる。とはいえ，「ほのぼのと→かすみたなびく」も『新古今』の時代の「ほのぼのと」の用法として一般的なものであったとは言えず，「ほのぼのと」という副詞が二句目を飛び越えて下句にかかると考えることには異論もあろうが，用例7で見た「ほのぼのとをかしき朝ぼらけに」（『源氏』）のように「ほのぼのと」を直接動詞句を修飾するのではなく，中止用法のように歌全体にかかるような語として位置付ける可能性があると考える。「春はあけぼの」「春霞」などの連想から，「ほのぼのと」が春の朝の情景である「霞がたなびくさま」と結び付くと考えるのであるが，これは和歌の修辞技法の問題として別途論ずる必要があるので，ここでは可能性を指摘するにとどめる。

2.6　明治時代以降の「ほのぼの（と）」

次に，明治時代以降の用法をまとめると，表5のようになる。

表5　明治から戦後までの用例

	夜明け	朝以外の薄明り・光	感情	程度
明治	12	4	0	1
大正・戦前 (注6)	12	27	21	0
戦後	3	3	18	0

明治時代はほぼ江戸時代の状況と変わらないと言ってよいのであるが，大正・戦前になると表に「感情」として区分した用法が登場する。

20 「そして瞬く間に三百人，一人残さず眠らせてしまって，はじめてほのぼのとした自尊心の満足があった。」（織田作之助『猿飛佐助』）

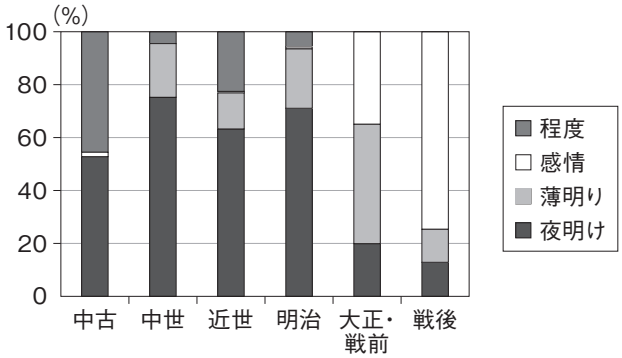
21 「あたらしい学問に専念できるのだ，と思った時には，自分のそれまで一度も味った事の無かった言うに言われぬほのぼのした悦びが胸に込み上げて来て，」（太宰治『惜別』）

そして「大正・戦前」から「戦後」へと，その割合は増える。このような感情を表す「ほのぼの」の例は，明治時代までは全く見られず，大正・戦前に現れたものが戦後になって定着し，用法の大半を占めるようになったことがわかる。このような表現が生じた経緯については「ほのぼの（と）」が夜明けだけでなく，薄明かり，明るい光景を表すようになり，この用法が増えたため，比ゆ的に

感情表現に転じて心や気持ちの明るさをも表すようになったと考えてよいだろう。

一方，かすかな程度を表していた用法は明治時代にわずかに1例となり，大正以降は見られなくなる。また，冒頭に述べたように，現代の新聞記事などでは人情の温かみや心地よさなどの「感情」を表す例がほとんどであるが，小説では現代のものでも時代小説などが含まれているため，「夜明け」や「夕暮れ」を表す例などもわずかながら見られる。

2.7 「ほのぼの（と）」の用法の変遷



グラフ1 「ほのぼの（と）」の変遷

最後に，グラフ1を見ながら「ほのぼの（と）」の変遷を全時代を通して整理してみよう。グラフを見ると，平安時代から明治時代まで，全体の約半数を占めていた「夜明け」の光景を表す用例が，「大正・戦前」「戦後」と割合を減らし，大正時代に現れた「感情」を表す用法が拡大する様子が見て取れる。また，「ほのぼの」がもっていた程度副詞の用法が現代には見られなくなる。このグラフから読み取れることと前節までの考察とをまとめると，次のようになる。

1）平安時代には
「ほのぼのと」　夜明けの光景を表す情態副詞
「ほのぼの」　「かすか」「わずか」なさまを表す程度副詞
のように使い分けられていた「ほのぼのと」「ほのぼの」の二つの形がしだいにその区別を失って，大正以降は程度副詞の用法が消滅した。

2）平安時代においてはオノマトペ「ほのぼのと」が「夜明けの光景」を表す慣用的な表現であったが，程度副詞「ほのぼの」が夜明け以外の薄明かりや光を表すようになったため，江戸時代以降は「ほのぼのと」が夜明けの情景を専門に表す語とは認識されなくなった。

3）「ほのぼのと」「ほのぼの」ともに薄明かりなどの光，明るさを表すようになったことから，明るい情景を表すようになり，大正時代以降はそれが比喩的に転じて感情の明るさ・暖かさを表すようになった。

このように，「ほのぼの（と）」についてはオノマトペの慣用的な用法と程度副詞の用法とが複雑に影響し合って意味・用法が変遷してきたと考える。

3 「つやつや」の意味・用法

同様の用例調査をオノマトペ「つやつや」についても試みた。それを整理したのが表6である。

表 6 「つやつや」の変遷

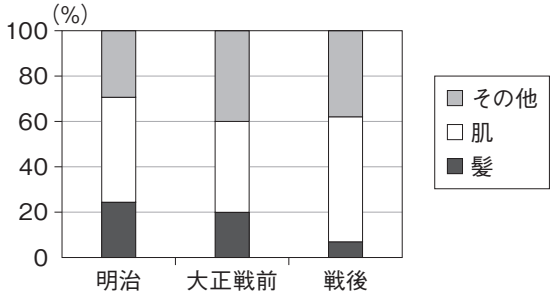
つやつや	髪	着物	肌	その他
中古	14	10	0	2
中世	0	0	0	0
近世	0	0	0	1
明治	5	0	11	7
大正戦前	9	0	18	18
戦後	2	0	18	13

紙幅の都合で詳細について触れることができないが，「つやつや」は平安時代においては女性の「髪の毛」と「着物」の美しさを表す慣用的表現であった[注7]。管見では鎌倉から江戸にかけてはほとんど例が見られず，明治期以降は「肌」を表す例が現れ，戦後に至る。「その他」にあたるものは，

明治　　葉・煙管・羊羹・硯
大正・戦前　　リンゴ・バナナ・髭・海苔・船・戸棚
戦後　　車体・ドラム缶・リンゴ・若葉

などであり，「つやつや」と光るものであればさまざまなものに用いられることがわかるが，このような例が現れるのは明治期以降であり，平安時代の用法とは断絶がある。

明治以降の用法の推移をグラフにしたのがグラフ2である。「戦後」における「髪」の割合が少々減ってはいるものの，大きな変化は見られず，ほぼ安定していると考えてよい。



グラフ 2 「つやつや」の変遷

おわりに

以上，繁閑よろしきを得ぬ考察となったが，「ほのぼの」「つやつや」の用例の観察により，オノマトペの持つ慣用表現としての性格は各語によって事情が異なるものの，何らかの体系を持ちながら変化しているのではないかと考えられる。さらに対象となる語を広げて体系的な把握に努めたい。

〈注〉

(1) 本稿で問題とするような語群を擬態語と呼ぶか擬声語と呼ぶかなど，多くの議論があるが，あいまいなイメージという利点をもつ外来語「オノマトペ」を用いることにする。

(2)「ほのぼの」をオノマトペと見なすかどうかについては議論の余地がある。オノマトペの畳語形は連濁を生じないという原則からは外れるが，「明るい光景」「暖かい感情」などをイメージさせる意味をもつという点と共通の語基「ほの」をもつ「ほんのり」という形があるという点がオノマトペ的性格であると考えて，オノマトペとして扱うことにする。

(3) 読売新聞の「ヨミダス文書館」（読売新聞社 Yomiuri On Line）を用いた。

(4)『本居宣長全集　第3巻』p299 筑摩書房（1971年）によったが一部表記をあらためた。

(5) 中西（1986）に，『源氏物語』の例を対象に分析した結果が指摘されている。

(6)「大正・戦前」は大正時代の初めから1945年までとする。

(7)「その他」に2例あるが，これは『枕草子』に用いられた「つやつやとまろにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるを」という例と，これを『大鏡』が引用したものであり，特殊な例と言ってよい。また，「つやつや」については平安から明治期まで「全然」「まったく」などと同じように打消しを強める陳述副詞の例も認められるのであるが，今回の考察からは除外した。

参考文献・資料

石川常彦（1974）「「ほのぼの」考 —— 新古今的情景構成の論のために」（「国語国文」43-7）
東郷吉男（1981）「「ほのぼの」と「ほのぼのと」—平安時代の用例を中心に—」（「解釈」27-12）
中西宇一（1986）『日本文法入門 —— 構造の論理』（和泉書院）

「本居宣長全集　第3巻」（筑摩書房1971年）
「暮らしの言葉　擬音・擬態語辞典」（講談社2003年）
「広辞苑　第六版」（岩波書店2008年）
「新潮文庫の100冊CD-ROM版」（新潮社）
「新潮文庫　明治の文豪CD-ROM版」（新潮社）
「ヨミダス文書館」（読売新聞社 Yomiuri On Line）
「日本古典文学大系」（国文学研究資料館 http://www.nijl.ac.jp のデータベースによる）

付記：本稿は2010年度宮田研究奨励金特別研究「日本語語彙史の体系的研究」の研究成果の一部である。